

【ポスター発表】

多様な家族形態の子どもが生き立ちを学ぶための支援

- 「生き立ちの授業」を教える教員への調査を通して -

文京学院大学 森 和子 (004390)

キーワード：養子・里子 真実告知 生き立ちの授業

1. 研究目的

血の繋がりが無い養親子や里親子がしっかりとした親子関係を構築するためには、子どもに対し「血のつながりはないが、親子である」ことを伝える真実告知(石村,1967b;Lois,1992;Watkins & Fisher, 1993; Keefer & Schooler, 2000; 家庭養護促進協会, 2004 岩崎, 2001)が必要であるという考え方は日本でも取り入れられるようになってきた。児童相談所や児童福祉機関では、告知の時期は思春期前期になる前の小学校低学年くらいまでに真実告知をすることを奨励している(家庭養護促進協会 1991)。その理由として、子どもが事情を理解できる年齢になってきていることと、小学校の生活科の授業で「生き立ちの授業」があることが挙げられる。生活科は1992年度から施行された小学校第1学年及び第2学年に設置された教科である。生活科は理科や社会という枠に入らない子どもの生活体験そのものを土台にしながら、自分とのかかわりを中心にして子どもが本当に自分の力で考え、生き生きとした学習を展開しようというのである。学習指導要領には「多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、役割が増えたことが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いを持って、意欲的に生活することができるようにする」とある。自分を支える人々・自分の成長に対し、感謝の気持ち・意欲的な生活をもつことが示されている。自分の成長には様々な人の支えがあったことに気づき、感謝の気持ちをもつとともに、これからの自分に自身をもって意欲的に生活できるようにするという目標が掲げられ、「生き立ちの授業」(呼び名は「命の授業」など様々)が行う学校が多い。就学前の子どもを里親委託や養子縁組をした血の繋がりが無い親子にとってお腹にいた頃や生まれた時のことは知る術もなく資料も少ないため、生活科の「生き立ちの授業」にどのように対応するかが大きな課題となる。「経験していないことも、もし自分だったらと想像しながら記入した里親」「過去を子どもと一緒に振り返り、一緒に過ごせなかった時間を少しでも埋められた」(埼玉県里親会 2009)という里親の声も聞く。また、子どもに真実告知がなかなか伝えられなかったり、大変苦慮している家庭も多い。子どもも自分の置かれた状況を本当に理解するには数年の時間がかかることがある。

学習指導要領の解説には「それぞれの家庭の事情、特に生育歴や家族構成などに十分配慮することが必要である。」と書かれているが、多様な家族形態の生徒がいる中で、現場の教員たちがどのような配慮のもとに「生き立ちの授業」に取り組んでいるか、授業の実態を把握し、養子など非血縁の親子も学ぶことも前提とした「生き立ちの授業」のあり方を検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査時期：2011年5月

調査協力者：関東の小学校に勤務する教員 14名

質問紙調査内容： 1. 教員経験 2. 1, 2年の担任をした回数 3. 生き立ちの授業の実施時期 4. 実施内容と方法 5. どのような生徒たちがいることを想定して授業をしたか 6. 過去に里親や養親から相談を受けた事があるか。 7. 里子や養子がいるクラスで「生き立ちの授業」をするとしたら、どのような授業をするか、であった。

3. 倫理的配慮

研究目的、方法などを調査協力者に説明した上で、文書による同意を得た。調査に関しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して行った。調査票はすべて無記名とし、結果は研究目的のみに使用され、かつ、統計的に処理するため個人が特定される事がない旨を記した上で協力者からの了解を得ている。

4. 研究結果

研究協力者の基本属性として、教員経験平均 24.8 年で、1, 2 年の担任をした平均回数 8.5 回であった。1 年で生い立ちの授業を行った教員は 9 名で実施時期は、1 月から 3 月にかけてが多かった。2 年で生い立ちの授業を行った教員は 14 名全員で実施時期は、10 月～3 月頃に実施していた。どのような生徒を想定して授業を行ったかという質問には、母子家庭が 13 名が最も多く、その他として祖母に育てられている家庭 2 名あった。生い立ちの授業の実施内容と方法は、表の通りである。生まれる前については 3 分 1 が実施していなかった。全体的に家族から話を聞くという取り組みが多く行われていた。相談されたら授業のあり方を検討するという教員は 11 名であった。過去に相談を受けた事があるという教員は 2 名であった。里子や養子がいるクラスで「生い立ちの授業」をするとしたら、どのような授業をするかという質問では、「この 1 年を振り返り、家族に支えられている事や、保護者に愛されていることがわかるような授業」「人の命のつながりという人類という視点から授業を行う」という意見があった。

表 1 「生い立ちの授業」の内容と方法

内容	生まれる前		生まれた時		現在まで	
	実施	なし	実施	なし	実施	なし
a. 配布資料に記入	5	2	7	0	6	0
b. 写真思い出の品持参	3		6		6	
c. 家族から話を聞く	2		7		7	
d. 手紙を書いてもらう	5		4		4	
e. その他	3		0		0	

表 2 授業で想定する家庭

	家庭の種類	
1	母子家庭	13
2	父子家庭	8
3	ステップファミリー	3
4	里親家庭	1
5	養子縁組家庭	0
6	その他	2

【考察と結論】

小学校の現場では子どもの生育歴を知らない場合が多いので、事前に学年だよりで取り組みについて知らせ、差し支えのある場合は連絡をもらうようにしている、回答できる方のみをお願いしているという対応が何人かから聞かれた。多様な家族への配慮について教員も苦慮している実態がうかがえる。過去に里親や養親から相談を受けた事がある教員は、経験により多様な家庭を想定することができている。里親家庭や養子縁組家庭の子どもがいた場合「家庭にもいろいろな家族があることを理解させるように配慮」「生まれる前や生まれた時のことを話題にするのではなく、現在の自分になるまでにどのようなことができるようになったか、誰のお陰なのかを中心に授業したい」などの意見があり、ほとんどの教員は相談を受ければ授業のあり方を検討するという柔軟な姿勢でのぞんでいた。今回の調査により「生い立ちの授業」のあり方に対する教員の目的意識の見直しが起きていることは特筆すべきことだと考える。里親や養親からの積極的な相談が望ましいことと、様々な家族に対して具体的に教員がどのように配慮したらよいか準備できるような研修の実施が有効であることが示唆された。